

草の芽句会だより

NO,132
19 8,1

花木槿町議選挙の声走る

節子

松葉杖たよりと書きくるカンナ咲く

涼風の城濠に添ひ歩きけり

貞子

城歩きおしやべりしては句座暑し

炎天の木陰工夫等打ち合せ

範子

一歩ずつ妻励ましつ夏の城

見返り坂葛の新芽ののびやかに

純子

夏萩の咲くを待たるる城の角

蝉時雨せかされるごと城の径

禮子

緑陰の見返り坂に歩を休め

見返り坂覆いつくして夏木立

剋子

先生の句碑を包みて蝉時雨

尾を立て、猫横ぎりし半夏草

文子

半夏草小さき一穂上げ初めし

台風一過朝戸出の空晴れわたり

芳子

咲きそめし萩揺らしゆく朝の風

出席者 氏家 川原 吉崎 森 馬場 小山
投句者 大黒 小林



朝から猛烈な暑さである。降るような蝉しぐれが暑さを倍増させる。それでも力の限り鳴く蝉に背中を押されて見返り坂を上る。重なり合った木々の枝が坂道に影をつくり、思うほどに暑くはない。坂のベンチには涼風さえ吹いていた。腰かけて、しばし城山の声に耳を澄ませる。凄まじい蝉しぐれの中、法師蝉を聞き分ける。鳩の鳴き声も。どこかで子供たちが騒いでいる。八月はお盆の月、帰省客の世話に追われるが暑さも今が峠。鬱蒼と茂る木々の緑にも心なしか疲れが見える。夏が過ぎれば食欲の秋、おしやれの秋である。もう一頑張りしよう。雑草の中に小さな秋草の花を見つけた。八日はもう立秋である。